

第14回
医用原子力技術研究振興財団公開講演会
市民公開講座

- 南東北グループが挑戦する世界最先端の放射線治療 -

9月30日(土) 13:00 ~ 16:00

講演1

ホウ素中性子捕捉療法が拓く新しいがん治療の可能性について
廣瀬 勝己(脳神経疾患研究所附属南東北BNCT研究センター)

講演2

陽子線治療でどのような病気が治るのですか?
村上 昌雄(脳神経疾患研究所附属南東北がん陽子線治療センター)

特別講演

がんと共に生きる

鳥越 俊太郎(ニュースの職人 ジャーナリスト)

主催:公益財団法人医用原子力技術研究振興財団

共催:一般財団法人脳神経疾患研究所



市民公開講演会 講演 1

ホウ素中性子捕捉療法が拓く 新しいがん治療の可能性について

廣瀬 勝己

脳神経疾患研究所 附属 南東北 BNCT 研究センター 診療所長

略 歴

脳神経疾患研究所附属南東北BNCT研究センター・放射線治療科・診療所長
弘前大学大学院医学研究科・客員講師/ 研究員
2009年 弘前大学医学部卒業
2013年 弘前大学大学院医学研究科博士課程修了
2013年 弘前大学大学院医学研究科放射線科学講座・助教
2015年より現職

(所属学会)

日本放射線腫瘍学会、米国放射線腫瘍学会、欧州放射線腫瘍学会、日本癌治療学会、日本中性子捕捉療法学会、国際中性子捕捉療法学会

現在のがん治療はまだ発展途上であり、“治る”がんが増えてきたとはいえ、それはまだ多くがんの一部でしかありません。外科的手術であれ放射線治療であれ、また旧来の抗がん剤や分子標的薬といわれる新たな抗がん剤であれ、腫瘍にダメージを与えるのと同時に多かれ少なかれ正常な組織にもダメージを与えてしまいます。このため治療のチャンスは限られているといわざるをえず、適切に治療選択を行わなければなりません。がん細胞に積極的に取り込まれるホウ素に向かって中性子をあて、そのがん細胞1個1個の範囲内でダメージを与えることのできるBNCT（ホウ素中性子捕捉療法）という治療は、すぐ近くの正常細胞へのダメージを最小限におさえることができる、今までにない画期的な特徴もっています。

この新しい治療をいよいよ病院レベルで実施することが可能になりつつあります。この技術が一般化され適切な治療の方法とタイミングが明らかとなれば、また一つ、がんを制圧する大きな手段を得ることになります。治療の余地のない窮地に陥った状況のがん患者さんでもBNCTを実施できる可能性がありますし、他の治療と効率的に組み合わせることが可能になり相乗的に有効ながん治療を実現することも期待できます。これまで培われたBNCTの臨床研究データをもとに、今まさに当院で、世界で初めて実践されている病院レベルのBNCTとがん治療の将来像をお話しします。



市民公開講演会 講演 2

陽子線治療でどのような病気が治るのですか？

村上 昌雄

脳神経疾患研究所 附属 南東北がん陽子線治療センター長

略 歴

1982年 神戸大学医学部卒業、神戸大学医学部研修医
1983年 川崎医科大学附属附属病院研修医
1984年 大阪警察病院放射線科研修医
1986年 神戸大学病院放射線科助手
1987年 天理よろづ相談所病院放射線科医院・副部長
1999年 兵庫県健康福祉部県立病院局経営課課長補佐
(県立粒子線治療センター整備室)
2001年 兵庫県立粒子線医療センター放射線科長

2005年 兵庫県立粒子線医療センター医療部長
2009年 兵庫県立粒子線医療センター副院長
2010年 兵庫県立粒子線医療センター院長
神戸大学客員教授(粒子線医学部門)
大阪大学招聘教授(保健学専攻)
独立行政法人医薬基盤研究所客員研究員
2012年 獨協医科大学医学部教授・獨協医科大学病院放射線治療センター長
2017年 獨協医科大学特任教授
南東北がん陽子線治療センターセンター長

陽子線治療では水素の原子核である陽子を光速近くまで加速して、がんに向けて照射します。皮膚を貫いて体内に入った陽子は徐々にエネルギーを失いますが、腫瘍を超えたところで完全に停止するよう調整します。すると陽子線が停止する際、物理的特性としてブラッグピークを形成して停止しますので、腫瘍に最大限のエネルギーを賦与した後、体内で陽子線は停止します。従来から用いられているX線などの放射線治療はがんのみならず周囲の正常な細胞へも影響が及んでいました。しかし陽子線治療においては、ブラッグピークを活用することにより、がんに集中した照射が可能となり、切らずにがんを治すことができます。

我が国では陽子線治療は2001年より先進医療で行われてきましたが、2016年にはまず小児がんにおいて保険診療が認められました。今後、さらに多くの疾患に保険診療化が進むと期待されています。本講座では陽子線治療を行っている疾患について、実例を中心に述べてゆこうと思っています。



市民公開講演会 特別講演 がんと共に生きる

ニュースの職人 鳥越 俊太郎

ジャーナリスト

略 歴

1940年3月13日 福岡県吉井町(現うきは市)生まれ
1958年3月 久留米大附設高校卒
1965年3月 京都大学文学部国史学科卒
4月 毎日新聞社入社、新潟支局、大阪本社社会部、東京社会部、サンデー毎日編集部、クエーカータウン・フリープレス社に1年職場留学、外信部(テヘラン特派員)、サンデー毎日編集長
1989年8月 毎日新聞退社
10月 テレビ朝日系列「ザ・スクープ」キャスター
1995年10月～2001年3月 同上「サンデージャングル」キャスター
2002年10月～ 「ザ・スクープスペシャル」キャスター
2002年10月～2011年3月 「スーパーモーニング」コメンテーター
2002年10月～2005年3月 TBS ラジオ「CUBE」
2004年4月～2005年3月 フジテレビ系列「僕らの音楽」
2008年4月～2015年9月 BS朝日「医療の現場」キャスター
2009年7月～ 岩谷時子音楽文化振興財団・評議委員

■受賞歴

2001年4月 「日本記者クラブ賞」(ザ・スクープの桶川女子大生ストーカー事件報道に対し)
2004年5月 「日本ギャラクシー賞報道活動部門大賞」(ザ・スクープスペシャルの警察裏金報道に対し)
2014年4月 「ニューヨーク・フェスティバル国際テレビ・映画賞 政治部門金賞」(ザ・スクープスペシャル「原発と原爆」に対し)

■主な著書

『君は人生を戦い抜く覚悟ができていますか?』(日本実業出版社)
『がん患者』(講談社)
『祖父の流儀(ダンディズム)』(徳間書店)
『桶川女子大生ストーカー殺人事件』(メディアファクトリー)
『ニュースの職人』(PHP 研究所)
『人間力の磨き方』(講談社新書)
『鳥越俊太郎のエンディングノート』(アーススター)
『あめりか記者修行』(中公文庫)
『異見—鳥越俊太郎のジャーナリズム日誌』(現代人分社)
『細野豪志の証言』(講談社)

■プロフィール

1940年3月13日生まれ。福岡県吉井町(現うきは市)出身。京都大学文学部卒業後、毎日新聞社に入社。新潟支局、大阪社会部、東京社会部、「サンデー毎日」編集部に所属し、外信部(テヘラン特派員)を経て1988年4月より「サンデー毎日」編集長。1989年に退職して以降、テレビ朝日系列「ザ・スクープ」「サンデージャングル」でキャスターを務めるなど、テレビメディアに活動の場を移した。2005年、ステージ4の大腸がんが発覚、肺や肝臓への転移を経て4度の手術を行った。2010年から始めたスポーツジムに加え2012年にはホノルルマラソン完走を果たすなど健康的なライフスタイルを貫いている。現在もさまざまなメディアで「ニュースの職人」として活躍中。

2005年、ステージ4の大腸がんが発覚。肺や肝臓への転移を経て4回のがん手術を経験しています。自身の経験を元に、精力的に取り組んでいる「がんと向き合い方」、客観的視点から見た日本のがん治療の現状や心構

え、がんと共存方法、健康診断やがん検診の重要性、食生活に至るまで、ジャーナリストらしくリアルな現場取材や体験を踏まえお話しします。

